

## 言語の思想－国家と民族のことば

田中克彦著（日本放送出版協会 1975.12）

言語についてこれほど刺激的な文章を書く人を私はほかに知らない。本書は「闘う言語学者」田中克彦の言語論の代表作の一つであり、そして、理系学生として大学に入学した私が2年で理系の学問に挫折し、新たな専門を模索していたときに出会い、最も衝撃を受けた本である。

一般に言語学というものは、言語を人間から離れて存在する固有の体系であると考えることが多い。確かにそれはその通りなのだが、言語は純粋な体系であるのと同時に、とても「人間くさい」ものでもある。その「人間くささ」を本書は強烈に訴える。言語とはまずもって社会、政治、歴史、思想と不可分であると考える著者は、百数十の言語と民族を抱えるソ連邦の壮大な言語政策、二つの大国に挟まれたモンゴルの言語、そして日本語の漢字や方言の問題などを考察しながら、言語の社会性、政治性、歴史性、思想性を次々と呈示していく。一つだけ本書から例を挙げるならば、どの文字を使うのか——これも非常に政治的たり得る問題である。例えば、「ソビエト・イスラム圏においてアラビア文字からラテン文字への転換、これこそは、文字による、同系諸族の言語的・文化的、したがって政治的連繫を断って、新たな別の連繫へのくみかえを意味した」（第三章）のだ。さまざまな例を通して、言語と民族、言語と国家、言語と差別、言語と

イデオロギー、言語と権力……実に多様な問題が本書からは立ちあらわれてくる。

もともと語学好きではあったものの、言語学関連の本のつまらなさに辟易していた私は、本書を読み、こういう言語研究があり得るのか、と目を開かれる思いがした。その後、修士論文執筆から博士論文完成に至る約10年間、ソビエトにおける言語とイデオロギーの問題を執拗に追いつけることになったが、まともな言語学から見れば「邪道」であるこのテーマに取り組むに当たって、本書を何度読み返し、何度そこから力を得たことだろう。

本書の初版が出版されてからすでに30年以上。ここで語られている内容には、すでに古めかしく感じられる部分もある。挙げられている例もかなり政治的で、現代の学生には少し違和感を覚えさせるかもしれない。それに言語観もやや偏っていると言わざるを得ないだろう。しかし、言葉を使うことそのものが孕む多様な問題に気づかせてくれる本書の重要性は、今でも決して失われてはいない。

（外国語学部助教授 高橋健一郎）



## 霧のなかの子－行き場を失った子どもたちの物語

トリー・ヘイデン著 入江真佐子訳（早川書房 2005.4）

私は、「シーラという子」という本に出会ってから、トリー・ヘイデンの一連の作品に魅せられてきた。なぜ、彼女の作品にはそんな力が潜んでいるのだろうか。センセーショナルな内容を扱うノンフィクションであるのも一つの魅力であろう。不思議な表紙の絵も本を手にする興味をそそる。でも、一連の作品の底には、溢れるばかりのトリーの子どもの深い愛を感じるのだ。トリーの子どもの向かう姿勢が真摯で、子どもを変えていく力に胸を打たれてしまう。

小学校の情緒障害学級の教師であるトリーは、幼児に火をつけるという傷害事件をおこした6歳のシーラと出会う。トリーは、特別教室でシーラと遊んだり、勉強したりするうちにシーラが虐待を受けているのを知っていく。シーラがその後どのように成長していくか描かれているのが「タイガーと呼ばれた子」である。

「よその子」は、トリーのクラスの自閉症のブーや読字障害のロリ、兄弟を殺され憎しみにとらわれている粗悪なトマン、12歳で妊娠しているクローディアらの日常の詳細な記録である。

「檻の中の子」、「幽霊のような子」では、何年もの間誰とも口をきかなかったケヴィンやジェイデイとの交流を綴っている。試行錯誤を繰り返しながら、トリーの真剣な心が伝わって、彼らは言葉を発していく。押し黙っていたのは激しい怒りと苦しみが隠されていたのだ。

うつろな表情でトレットトレーニング中の8歳のレスリーと母親を扱ったのが、「愛されない子」である。学歴も高く、酒や不倫で浮

いた存在である母自身が、人づきあいに大きな問題を抱えていることを知る。トリーは母親に特殊教室を手伝ってもらいながら、レスリーへの接し方を教えていく様は実際的で面白い。

「ヴィーナスという子」では、あらゆる反応を一切しない7歳のヴィーナスにトリーは翻弄される。ヴィーナスは時として手がつけられないほどの大暴れをするのだ。トリーはそんなヴィーナスの行動を不可解に思うが、この美しい子に恐ろしいことがおこっていたことを見抜けなかった。

トリーの最新の作品が「霧の中の子」である。天使のような5歳のドレイクがなぜ話そうとしないのか、障害があっても話せないのか、トリーは悩む。イタリア人の母は、息子は自分といる時だけ話ができるのだと子守唄を吹き込んだテープを持ってくる。大富豪の祖父は、孫を話せるようにすることをトリーに威圧的に求める。しかし、もしドレイクの脳に障害があっても話ができないのならば、この家族はどうなっていくのだろう。

子どもの幸せを見つめるトリーから、ますます目がはなせないのである。

（学生相談室 池田伸子）

